

国文学研究資料館報

第12号

昭和54年 3 月

日本文学の魅力

— 中世文学を中心として — (講演要旨)

ダグラス・ミルズ

(はじめに) 外国人である私が日本文学をどう受けとめているか、皆さまは興味をお持ちでしょう。また、日本文学の本当のすばらしさが、はたして日本人以外に伝わるのかとお考えの方もありでしょう。日本人として生まれついたという事実のゆえに、日本人には自国の文化に対する固有の理解が可能で、これは本来的に外国人にはできないことだ、という考えがあるかもしれません。とくに過去においてこのような考えはたしかに存在しておりました。私自身はそのような考えに絶体(ぜったい)に与しないつもりだと、最初に明言致したく思います。

もちろん、私は外国文化の真の理解に到達するということがいかに難しいか、その難しさを毛頭軽視するつもりはございません。ただ、このついでに申し上げますと、現代の日本人にとっては、日本古典文学は外国人にとつてと同じくらいの難しさが伴うのではないでしょう。か。私はここに、日本文学全体についての詠嘆的な讃辞を呈そうとして、そのものではございません。たしかに、日本のものなら何でも「魅力的」だとする外国人もあります。ですが私はちがいます。そのような過度の「日本びいき」に出くわすと不安になります。また私はなにも他の時代の日本文学に比べて、中世文学だけがことさら「魅力的」と主張しようとして

目次	
日本文学の魅力	
— 中世文学を中心として	
ダグラス・ミルズ	1
第二回国際日本文学研究集会	7
図書資料管理システム	9
文献資料部事業報告	11
— 大久保正	11
研究情報部事業報告	13
— 古川清彦	13
共同研究	15
評議員会議	15
昭和五十四年度春季学会開催一覧	16

に限って話します理由は、たまたまそれが私の専門分野であるからにほかなりません。

英国における日本研究の現状をふりかえってみますと、現代日本の研究、特に現代史、政治・経済学に重点を置く傾向があります。これは現在の状況では不可避なことだとは思いますが。しかし、現代日本研究の指導的立場にある一部の専門家が、日本の古典の研究を現代日本研究の附属物であるとか、時代遅れであるとか考えるのは、まことに嘆かわしいことに思われます。私個人は日本の古典を研究することが日本での英国の車の売行きにたとえ貢献しなくともどうということはない、という考えです。大学における学術研究は、それ自体で固有の価値を持つと私は信じます。遠い国の、遠い時代の説話の研究に没頭していることに驚きを示す人に出会うことがあります。私はちっとも気になりません。

(中世説話文学) — 「宇治拾遺物語」

「今昔物語」——例話とその解説省略—これらの話をいずれも「宇治拾遺」だけに限定しましたのは、この説話集が中世の作品だからです。しかし、「宇治拾遺」と密接な関係があり、「宇治拾遺」よりもずっと大部的な「今昔物語」の話を例にとることも可能です。「今昔物語」の成立した時期は十二世紀初めとされていますが、中世の要素も多分にあり、平安時代と中世との過渡期的作品とみなすことができます。事実、「今昔」も「宇治拾遺」も平安時代に関する説話が多く含まれ、これらは宮廷生活に限らず日本人の生活の全体像を示す意味で誠に貴重と申せます。平安時代に、説話文学以外にどのようなタイプの文学があったかと言えば、散文・韻文を問わず、貴族の世界を描いた文学に限られると言つて差し支えないでしょう。しかし、説話文学の重要性はそれが貴族以外の日本人の生活を描き出していることのみによるものではありません。説話文

学を通して貴族のきわめて人間的な側面を見ることが可能だ。

『宇治拾遺』と『今昔』にも宮廷人の姿は無尽蔵と書いていくくらい、描き出されております。そしてこれらの宮廷人は「源氏」の「雨夜の品定め」に耽るなよなよした男性とはひと味ちがっております。秀逸な文学ではないかもしれませんが、ともかく面白いと思います。——例話省略——『宇治拾遺』と『今昔』に含まれる説話は実に多岐にわたります。すなわち、本生譚・靈験譚・往生譚などを含む仏教説話、民族信仰・迷信に関する説話、武士に関する説話、和歌をめぐる説話・貴族および平民の日常生活を叙した説話などです。

『宇治拾遺』、『今昔』もともにフォーク・テールを集めた話集ではないという事実には留意せねばなりません。これらの説話は、貴賤を問わず、あらゆる階層の人々の興味に訴えました。どのようにして一般に流布したか——この点不明なのが惜しまれます。

これらの文学作品は、学問的研究対象として価値が低いとお考えの方がおありでしょうか。もしおありでしたら、私には強力な味方があります。それは他でもない芥川龍之介で

す。芥川が『今昔』や『宇治拾遺』を愛読したことは周知の通りです。

芥川はこれらの物語に内在するグロテスクな要素に相当惹かれていたようであり、また素朴な登場人物の出て来るこれらの単純な説話に、芥川自身の創作目的に適した理想的な素材を発見したのでした。たとえば、有名な「鼻」があります。異常に鼻が長い禪珍（智）内供は、元の話でも、鼻を短くするために、とてつもない手段を講じ、また粥を食べる間、弟子が鼻を持ち上げていますが、あやまって落ちてしまふ、といった筋になっていきます。芥川はこれに着色を施して、話の結末で、鼻が普通の長さになると前よりも却って一層気にかかり出す内供の心理をつけ加えております。また、同じく『今昔』を翻案した「轍の中」は、黒沢の映画「羅生門」によって欧米でも有名になっております。（もともと私は、黒沢が余分なものをつけ足したために、原作とちがったものになってしまったと思います。）芥川の技巧はさらに、「地獄変」で際立っております。この作品の構想のもとになったのは、さきに触れました、自らの家が焼け落ちて平気な絵仏師の挿話です。

「地獄変」で、狂信的に仕事に打ちこんでいる絵師が主君に作品の中で燃える炎を描く技巧を完成するために、牛車の中で焼死する生身の人間が必要だと申し出ます。主君が絵師のために選んだ犠牲者は、絵師自身の娘に他なりません。このように芥川は、もとの話に着色を施しました。『今昔』や『宇治拾遺』に心から傾倒していたことは芥川自身の言葉が証明します。

こんでいる絵師が主君に作品の中で燃える炎を描く技巧を完成するために、牛車の中で焼死する生身の人間が必要だと申し出ます。主君が絵師のために選んだ犠牲者は、絵師自身の娘に他なりません。このように芥川は、もとの話に着色を施しました。『今昔』や『宇治拾遺』に心から傾倒していたことは芥川自身の言葉が証明します。

（『源氏供養』と『源氏物語』）説話文学の対極ともいふべき平安朝宮廷文学の伝統は散文・韻文の区別を問わず、中世に到ってもなお重要でありました。このことに関連して世阿弥の謡曲「源氏供養」は一考に値します。——梗概、解説省略——『源氏供養』を私がとりあげる理由は、謡曲というジャンルの中で秀れた作品であるということのほかに、「つくり物語」が文学をなく狂言綺語と考えられていた、という点をはつきりさせることにあります。日本文学の最高傑作が女性のための軽薄な娯楽や暇つぶしの作品として受けとめられていたことは注目してよいと思います。と申しますのは「源氏物語」は世界で最初の小説である。とりわけ最初の「心理小説」であるという事実が、事実であることはまちがいないものの、その意義が誇大視される

きらいがあるように思えるからです。『源氏物語』は平安時代に書かれた「源氏」以前および以後のあらゆるつくり物語、のみならず、「枕草子」を例外とすれば、あらゆる種類の散文をはるかに凌いで屹立しております。『源氏物語』が生まれ出る業地となつた散文文学は傑作を生み出すには程遠いものでした。それを超える形で、あれだけの水準が達成されたことは、素晴らしいと言いたくなくも当然です。これはひとえに紫式部が一個の天才であつたからにはかなりません。

『源氏物語』の卓越性に関しては、私がどくどく申上げるまでもございませぬ。紫式部が人間の心理について大変な洞察力を持っていたことは疑いの余地がありません。読む者の心を捉えて離さず、本質的には非現実の、理想化されたつくりものの世界を讀者は受け入れることができま

す。それは感受性、美的繊細さ、情緒のこまやかさが最高の価値を持つ、まことに美しい世界です。光源氏をめぐる終りの何巻かと、宇治十帖には暗い雰囲気は漂っておりますが、それにもかかわらず、みごとな抒情性が全巻を貫いて流れております。

— 省略 —

しかし、作者は女性で、女性を念頭において書いた、というか、物語などという軽薄な筆のすざびは、女性のためのものという風潮の社会を相手に創作していたわけです。「蜚の巻」で光源氏は物語をけなします、そのすぐあとで玉かつらに詫びを入れ、物語を弁護する有名な一節があります。これは光源氏の口を借りて、紫式部が自分自身の小説観を述べたものにほかなりません。物語をけなした光源氏の最初のことばはおそらく多くの人が感じていたことをびたりと言いついでております。この多数意見には其感の余地がありません。つくり物語の魅力、繊細さ、詩的洗練にもかかわらず、平安文学に登場する求愛者のあるものは、心理学的用語を借りて申しますと、「情緒未発達」と呼べるかもしれません。かれらは愛の観念を愛し、高嶺の花を追いかけることに汲々とし、いったん目的が達せられると対象に対する興味をなくしてしまいます。そういったわけで、芥川が「好色」のなかで平中に施した心理的着色は適切と申せます。

(和歌) — 省略 — 平安朝の和歌の本質は「ものあはれ」すなわち繊

細な感受性に求められます。「もの

のあはれ」は英語では "Play of things" (ものことの哀れ、ほいさま) と訳されており、"the pathos, or the poignancy of things" (ものことの切々として、心に沁み入るさま) とでもいう方が、より適切でしょう。言うまでもなく、これは現世が仮りそのもので移ろい易く無常である、という仏教思想の影響によるものでした。このような感情を触発するとされたものは、慣習上和歌の題材としてふさわしいと考えられた極く僅かの自然界の出来事や人間の体験に限られておりました。この限られた狭い範囲内で、また厳しく制約された様式を守って、無数の歌が詠まれ、しかもしばしば似たり寄つたりの歌という観があります。当然のことながら、歌の良し悪しの目安のひとつは、ことばの含蓄ないし言外の暗示ということになります。

平安朝前半の和歌の場合、この言外の暗示性つまり余情ということは、ことばの意味範囲を広げはしますが、和歌に深味を加えるようには作用致しません。しかし、平安朝末期ともなると、和歌の気風もかなり変わって参ります。俊成と定家の和歌に対する理念は「ことば古く、心あたらし」と要約されます。この時期に、歌の文字通りの意味を越えて、隠れた意味を暗示することは力の強まりつつあったことは重要です。ある場合には、歌は現世の彼岸にある無限を暗示する、とさえ言えます。ひとつの情景の底にある隠れた美を暗示する力を備えた歌の特質が「幽玄」ということばで示されます。これは英語では、「深遠な神秘性」とでも言う以外、訳しようのないことばです。鎌倉時代のはじめともなると短歌の典型的な雰囲気は繊細な憂鬱にかわつて、たとえば「新古今」の「三夕の歌」がみごとに例証するような雰囲気にかわります。さらに、俊成自身も、自己の最高の作と自認した歌によつてもうかがえます。

夕されば野辺の秋風身にしみて
鶉鳴くなり深草の里

「さび」の美的理念の好例として、この歌に如くものはありません。「さび」のなかに俊成は美を見出します。それは言葉では言い尽くせぬ美であり、人の心に、ある種の想念——英詩人ワーズワスが "thoughts that do often lie too deep for tears" (涙にあまる深き思い) と呼んだのに等しい想念を呼び起こします。

『新古今』時代の歌人が、使い古された歌の主題に新しい生命を吹きこむべく、手のこんだ技巧を必要としたことはまちがいありません。批評家の中には、ことばづかいの技巧があまりに手が込み過ぎていて、象徴的手法が過多に流れ曖昧だとする意見もあります。「新古今」が日本の和歌の頂点に立つという見解は筋が通っており、私自身も支持しますが、反面、短歌の形式上の制約のために、「新古今」の線に沿ってこれ以上和歌が発展する余地はあまりなかつたわけで、大部分の批評家によれば、これ以後の勅撰和歌集で歌の水準の低下が起こります。

(連歌) 前進のための道は短歌ではなく「連歌」に求められます。和歌の伝統の担い手は、じつにこの「連歌」だったのです。

「連歌」には、和歌の制作にふさわしい用語に関する制約がいっそう窮屈な形で保ち続けられております。また先ほど来、論じております詩的理念が必然的に保ち続けられております。「幽玄」の境地が格別顕著にみられるのは実はこの「連歌」にかなりません。さらに、この「連歌」という形式こそ、日本古来の和歌で

重要視された「暗示力」を、作者が最大限有効に駆使することを可能にしたのでした。―省略―高度な芸術的創作が可能なのは、題材や語句の上で表面的につながりよう意識的に努めるのでなく、連句がいわば直観的に決められるよう、前の句の境地に深く自己を投入して考える必要がありました。そういったわけで、連歌の創作は瞑想的かつほとんど宗教的と言つてもよい心的態度を必要としました。これは俊成とか定家が短歌制作のさいに必要と考えた、高度の精神集中と瞑想とによつて、歌の話題と神秘的な一体化を遂げる態度に似ていなくもありません。俊成の和歌を特徴づけたのと同じ「幽玄」という美的理念は、中世連歌の特徴でもあります。

俊成に影響を及ぼした宗教上の教義は、天台宗の一面である「止観」の教義でした。連歌に対する仏教の影響は主として禅です。十四世紀初頭までは、禅は実用面（たとえば禅僧が足利将軍の政治顧問であつたように）と文化面の両方で、日本人の生活のなかで重要な役割を果たすに到つておりました。―省略―禅の文学的影響は、禅寺の遙か圏外にまで及びました。心敬が必要だとした、

連歌の創作にあつて直観を重視する態度は、禅に負うところ大です。さらに心敬がよしとする叙景的な詩は、輪廓がはっきりしておらず、すべてが不鮮明にぼかしてあるような詩でした。このような詩は典型的な禅画に似たところがあります。禅画の場合、一幅の風景画を例にとると、大胆で力強い数本のタッチが、霧や雲、あるいは「無」の中に消えて行き、何かを表すというよりも、暗示しておられます。

（謡曲）日本の古典芸能である謡曲も、謡曲とともに残っている狂言にうかがえる素朴な形態に起源を持ちます。さらに謡曲の場合にも、連歌の場合に比較すべき禅の影響ということがあります。美学的観点からいふなら、謡曲は全面的にとつていくらい、禅の影響を受けております。これは能舞台の無に近い空間や素朴なつくりもの、能役者の様式化された動作などの外形に限らず、さらに能の根本的性格そのものに到るまで言えることです。たとえば登場人物の基本的性格だけが描かれ、個人的なアイデンティティを与えることはまったく考慮されていないこと、また筋は概して、ことばで語られ、舞台の上では演じられず、たと

え演じられる場合でも写実的でなく様式化されていることなどが挙げられます。ことに超自然と「現実」界との相互作用は、深遠で神秘的な雰囲気をかもし出し、じじつ能には宗教的儀式を思わせるところがなくもありません。―省略―

ところで、能を正しく鑑賞することは難しい問題です。能は文学であると同時に舞台芸術です。能を文学としてのみ考えることはまちがっている、と仰言る方もあろうかと存じます。曾我伝説の研究の過程で私は曾我物の番外曲を読む機会がありました。これは現在では上演されないようですし、あるいはいまだかつて上演されたためしがないものもあるかと思ひます。たとえばもし、W・B・イェイツがたつたら、これらの番外曲をどう解したでしょうか。これらのあるものは、もし単に文学としてののみ考えられたら、ひどく陳腐に感ぜられます。反面、最高の謡曲のテキストはまことにもつて絶妙で、その文学的価値に疑いの余地はありません。私見では、文学的価値の高い謡曲のテキストは、芸術的美しさが舞台で正当に理解されるのに先立つて、文学作品として研究され、その文学的精妙さが正しく評価されるべきだと思います。外の理由はともかくとして、謡曲の言語は特別の様式化された措辞が用いられているからで、耳で聴いただけで理解することは、最も教養ある日本人の場合でも難しかろう、と申し上げてもよろしいのではないのでしょうか。世阿弥の時代には、能が上演されたさいのテンポは今ほど遅くなかつたことがたしかに知られておりますが、十四五世紀に、今日我々が知るような様式化された措辞に匹敵するものがあったかどうかは、私にはわかりません。テキストは能のほんの一部であり、音楽と、とりわけ舞いが劣らず重要であつた事実を認めねばなりません。従つて、作品のテーマが何であるか、最初から観客が知っているか、最初から観客が知っているか、とすれば、テキストが完全にわかることは、他の演劇の場合ほど必要でないのは、疑いの余地がありません。このことはヨーロッパのオペラをお考え下されば、おわかり頂けると存じます。

これは余談ですが、何年前か、英国国営放送（B・B・C）でアーサー・ウェイリー訳の能と、それにつづけて同じテーマを翻案した三島由紀夫の「近代能楽集」の一篇を放送したことがあります。聴取者がどの



程度三島を鑑賞出来たか知る由もありませんが、能の方は聴くに耐えないものであっただけは申せます。B・B・Cの俳優たちは、西洋演劇を演ずる場合と同じように、胸のうちをすべてぶちまけるような演じ方をしたのです。

そこで能の意味だけでなく精神を、はたして英語で伝えることが可能かどうか、という問題があります。そういえば、和歌の場合でも同じ問題があります。若干私見を申し上げますと、言うまでもなく、日本語と英語はこれ程ちがう言葉があらうかと思っくらしい、かけ離れております。語順のちがいが、ヨーロッパの言語が人称・数・時制に関していちいち明示するのに対し、日本語の方はあい

まい、といった風です。また日本の詩歌が具象的なイメージを用いるのに対し、英語ではしばしば抽象的なことが使われます。しかし、これらの難かしい諸点も、懸詞をどう訳すかという難問には比べるべくもありません。「ゆくえ しらゆきに」

という例をとりますと、「しら」はもちろん「知らず」と「白い」という二重の意味で用いられておりますが、これを英語に直すことは不可能か、なんとか訳しても滑稽に墮してしまいます。このような場合には、ふた通り訳をつけておくか、注をつけておくしかありません。もうひとつ「縁語」の問題があります。「小袖曾我」からとった一部で説明致します。箱根神社に僧侶として留まっていた欲しいという母の意志に五郎が背いたために、母は五郎を勸告しております。五郎が父の仇討に加わらず僧の身に留まるなら世間から臆病者扱いされるだろうし、また自らの意志に反して僧として留まり続けるなら、還俗したよりもなお罪は重い、と十郎は申し立てます。十郎のことに次の一節があります。

私はこれを次のように英訳してみました。

So deep his faith could
never be
Morning and night
He would regret
Being shut up in the shrine
at Hakone.

「心も染まぬ墨衣」の「染む」と「墨」は縁語です。「墨衣」は「黒衣」ですので、私はdeep(深い)ということばを導入して、black dye(黒い染料)という観念とのつながりを暗示したつもりです。'dye'(染料)ということばはどうしても英語でうまく言い換えができません。同様に、「浦島」の「浦(裏)は衣の縁語です。しかし「浦島が子」は日本語では単に序として機能しております。つまり、浦島伝説で浦島太郎は玉手箱を貰いますが、この「箱」は「箱根」に通じます。これはまったく翻訳のしようがありません。「明け暮れ」は「晝も夜も」という普通の表現ですが、「箱」は「あける」ものですので、「明け」はやはり縁語ということになります。これもまた訳せませんが、私は「箱根にて」をただ単に「in the Hakone Shrine」(箱根寺にて)と訳すかわりに

「being shut up in the Hakone shrine」(箱根寺に蟄居して)と訳すことによつて「箱」という概念を出すようにつとめました。「箱」は「あける」こともできますが、「しめる」(shut)とすべきものです。日本語は難かしい——しかし、それでこそ魅力的だと思ひます。

(平家物語) 『平家物語』はどのいう尺度で測ってみても傑作で、今日に到るまで、日本の一般読者を魅了し、作家・劇作家の創作欲をかき立てて参りました。明治以来、他国に劣らず日本にも国民的叙事詩がある、それが『平家物語』だ、という議論が行われております。しかし、このような議論は、まちがった叙事詩の通念を日本文学に押しつけることになる、と私は断言致します。しかも、このような議論は、まったく不必要な劣等感——の裏返しによる場合が多いようです。『平家物語』が叙事詩であるという議論に対して、いくつかの反論があります。たとえば、『平家物語』は断片的で構造的に緊密さを欠き、清盛・義仲・義経を扱った各部分が不統一であるなど。また、『平家物語』は個人の運命か、せいぜい一族の運命を扱うにすぎないのに国民的叙事詩と呼ぶのはおか

しいではないかと。しかし、これらの反論はいずれも本能的です。

『平家物語』が国民的叙事詩であるという議論に真向から反論するとしたら、「そもそも日本になぜ国民的叙事詩がなくてはいけないのか」と問うことでしよう。『平家物語』を、なせあるがままの形で受け取らないのでしようか。そうすれば、この作品を統一する主題は叙事詩ではなく、仏教思想だと申せます。清盛の悪行が応報をもたらし、平家一門の没落が諸行無常という仏教思想の正しさの証明とみなされます。こうみると、この作品に底流する情緒的雰囲気は、古い時代の文学作品と比べて高められてはいるが、基本的には異なるところがないことがわかります。合戦は恐怖をそそり、悲劇性は迫真的でありますが、哀切極まりない物語は叙事詩的というよりも抒情的です。

なるほど叙事詩的要素もたつぷりあることはありますが、われわれの関心は、大渦のように継起する事件よりも、個々の登場人物の悲しい運命に向けられます。とりわけ抒情的効果は、祇王、小督、千手の前などの女性の、心をうつロマンティックな悲恋物語が数多くちりばめられていることでいっそう高められておりま

す。これらの挿話が、武士の挿話と並んで謡曲に仕立てられたことは、充分頷けます。

(曾我物語) 『平家物語』が琵琶法師の語り起源を持つように、曾我物語も旅芸人の語った話から発達したと考えられます。本来、曾我物語は、曾我兄弟の怨霊を鎮めるための、一種の宗教的儀式として語られたものと思われませんが、多くの学者の見解によると、物語はある段階で変質し、その結果、虎なる人物が入って参りました。事実を申しますと、虎という名は物語を語りながら全国を脚射した巡礼の巫女の総称名に由来するようです。また曾我伝説は形の整った物語へと生成しますが、仏教的宣伝臭が強まり、曾我物語は安居院流の唱導師の演し物のひとつになったようです。

しかしながら、中世を通じて、女、つまり賢女は曾我伝説を広めるのに重要な役割を果たしつつ、物語を変質させる媒介となったことはまちがいありません。中世の終りともなると、徳川時代の曾我物語にはつきものの要素や、きまった調子が出来あがっておりまして、そのような要素のひとつとして、五郎の女、化粧坂の少将¹⁾があります。中世物語が

なぜこのような特徴をそなえるようになったかと申します、と語り手が個人的な体験を信仰の勤めとして物語り、物語に「色懺悔」の色彩を与えたことによります。しかし、時とともに、物語の目的が単なる娯楽の色彩を強めるにつれ、色恋の話というような面がそれ自体のために導入されたのは、自然な成り行きと申せます。

(義経伝説) このように、物語に新しい要素が加わっていく興味深い現象は、日本最大の英雄像ともいべき義経伝説の場合に見られます。十六世紀の初頭には、「座頭」琵琶法師の一種と呼ばれた盲目の吟遊詩人の演し物のひとつとして、若き日の義経と「浄瑠璃姫」との恋物語が入っていたという証拠があります。

この「浄瑠璃姫」は、義経が東北へ向かう途上立ち寄った八萩の長者の娘です。中世末期の日本で、この「浄瑠璃姫十二段草紙」の歌謡は大変人気を博し、この種の型の演し物全体が(のちに人形と三味線が加わって人形浄瑠璃となるように)、浄瑠璃として知られるに到りました。恋物語の要素とすることを離れて、この物語で注目すべき特徴は、幻想的、魔術的要素を含んでいる点です。

物語の主題として、源義経はずば抜けて人気がありました。現在する五十の「幸若舞」のうち五分の二が義経に関するものです。

義経に関する一群の重要な物語が十五世紀の軍記物「義経記」です。ただし、これには浄瑠璃伝説は入っておりません。「義経記」に歴史上の人物としての義経像を求めるのは無駄なことです。というのは「義経記」は一連の伝説が集成されて、「判官轟伝」という感情がすみずみにまで行きわたった作品にまとめあげられたものにすぎないからです。英雄的かつロマンティックであると同時に、最後には哀れな身の上となる人物像をつくりあげた物語なのです。

——「方丈記」「徒然草」「お伽草子」について省略——

(結語) 中世は転換期ないし過渡期にあたっておりました。過渡期ということばを使いますと、中世が他の時代に比べて、重要性において劣るといふ響きを持つかも知れませんが、こう感じますのは、あのようにな動乱の時代にあつたために、中世が暗黒の時代と呼ばれたためかも知れません。しかし、文学的な意味では、これは当を得ておりません。少くとも明治以前の日本文学の際

立つた特徴は、人間関係および自然に対する態度における感受性と繊細な感情とに求められます。これらは、とりわけ平安時代にみられる特質です。また「もののあはれ」という觀念は、人間のあらゆる営みは仮りためて、人生は夢だという仏教的な考へに影響されたものですが、アーサー・ウェイリーが「枕草子」を論じた本のなかで、平安時代における「いまめかし」という流行語の重要性を強調して述べた見解に、私も両手をあけて賛成します。平安朝貴族は歌

のなかで人生の無常を嘆きました。これはある程度はポーズであり、文学上のしきたりでもありました。貴族は、現在の瞬間をじつさいに楽しんでのです。中世になると、平安文学と同じ美的特質が残存しており、すが、修正され深味を加えております。驕りがあるためにいつそう思想を喚起するような自然美を愛好する態度、隠者の心の平静へのあこがれ、兼好にみられる枯淡や未完を好む態度、能の彼岸性など、多岐にわたります。が、これらの基盤となつていく繊細さと感受性は一貫して変わりありません。より華やかな苦く甘い平安的な美と、さび、渋み、侘びなどの枯淡な美と、そのいずれを採る

かは、古来の春秋の争いに似ております。皆さまは、強いて言えば私が「秋の人」であることにお気付き下さいましたでしょうか。

中世日本文学における庶民的要素の重要性についてはすでに申し上げました。しかし、日本人の国民性の一面について、まだ申し上げていないことがございます。

日本の美的伝統は感傷と悲しみを好む傾向があり、そこから偉大な美が生まれました。その反面、日本人について語る外国人は、日本人が本質的には陽気な国民であるという点で一致しております。中世の庶民的文学の多くに、涙っぽい要素があることはたしかです。しかし、狂言ほど、生きる喜びを謳歌する文学がほかにあるでしょうか。「宇治拾遺」およびその他若干の中世小説には、憂愁をはねとばす、民衆のはつらつとした現実感覚が溢れております。それからあの一休——仮りに、一休にまつわる滑稽な話が多くは典拠のないものだとしてもです。また、同時に、滑稽（ないしは場合によっては下品な）歌もつくつた宗長も、いうまでもありません。

合は、人生の陽気な側面だと言えるでしょう。中世には、これらの両面が、理想的な形で交ぜ合わされております。中世を専門分野として選んだことを私は後悔しませんでした。——そう私は断言致します。（国文学研究資料館客員教授・ケ

第二回

国際日本文学研究集会

一九七八年、十一月十六日・十七日の両日、国文学研究資料館において、第二回国際日本文学研究集会が開催された。

第一回は、前年の十一月、国際日本文学研究集会組織委員会（委員長、国文学研究資料館長市古貞次）主催のもとに、日本学術振興会の援助を受けて当館で実施されたのであるが、参加者をはじめ各方面から、今後このような研究集会を開催することが望ましいという希望があつたので、今回から、当館主催で、継続的に行なわれることになつたのである。そこで当館に国際日本文学研究集会委員会（委員長、井本農一）が設けられ、館長の諮問に応じ、研究集会の

ムブリッジ大学教授ダグラス・ミルズ博士の講演は当館の第九回公開講演会として、昭和五三年十一月十八日午後、大会議室において催された。講演は二時間にわたり中世文学全般に及んだが、その要点的ダイジェストを作成して掲載した。

の企画と組織に當つた。

研究集会参加者は一〇九名（前回は八五名）、うち四五名が海外からの参加者であつた。

前回は最初の試みでもあつたので、二つの特別講演、五つの研究発表、三つの見学という多彩ではあるが、や、総花的であつた。今回は研究発表の応募者も増したので、七つの研究発表と、半日のシンポジウムという一層研究集会らしい内容となつた。

発表等の内容は、「国際日本文学研究集会会議録（第二回）」に詳しく記録されているが、概要を報告すれば次の通りである。

市古館長の開会のあいさつその後、

第一日の午前中は、臼田甚五郎氏(国学院大学の司会のもとに、上代に関して、桑川光樹氏(フェリス女学院大学)が研究史に触れつ、時間論的研究を、ヘルベルト・ブルチョウ氏(カールフォルニア大学バークレイ)がコスモス(ニギ)とカオス(アラ)の宗教的空間論との関連で霧旅歌の研究を発表され、当館客員教授のミルズ氏(ケンブリッジ大学)や、古代の日本文化との関連が目される韓国の金用淑氏(淑明女子大学校)の質問など、海外から参加された研究者の発言もあり、国際集合理的い雰囲気が出された。

午後は、福田秀一氏(国文学研究資料館)の司会のもとに、日本文学に特徴的な風土の問題について長谷章久氏(埼玉大学)が、また歌風、歌論に関連して、それぞれフィリップ・ハリス氏(スタンフォード大学)、リューベン・ゲーリング氏(上智大学・院生)の発表があり、日本の研究者との質問や意見の交換も、昨年より一層密度の高いものになったように感ぜられた。

三時のお茶のあとは、池田重氏(千葉大学)の司会で、アンドリュウ・ガーストル氏(ハーバード大学・院生)が、実際にカセット・テープの

曲を流して浄瑠璃の節付けについて、また湯沼誠二氏(北海道教育大学)が、外国資料を駆使して高村光太郎のアメリカ体験について、それぞれ発表された。

二日目のシンポジウム「一九世紀における日本文学」では、まず司会の長谷川泉氏(学習院大学)が、(a)近代文学の起点的内面構造、(b)近代文学を形づくる文学理論の巨視的体系と作品の微視的評価、(c)西欧的近代に対する反近代ないし近代の超克という「近世から近代へ」を見る視点を提起され、前田愛氏(立教大学)から、「小説神髓」の模写理論における視覚革命について、ドナルド・キーン氏(コロンビア大学)から、河竹黙阿弥の戯曲の一九世紀の世界文学における高い評価について、また、アンドレ・デルティユ氏(パリ第三大学・院生)から、幸田露伴の文学が、伝統も近代も超えたコスモス性をもつことについて、それぞれ発表があつて、討論に移った。

日本文学を一九世紀という視野で捉えることは、おそらくはじめての試みで、国際研究集会にふさわしいテーマであつたと考えられる。しかしそれだけに、時間がかなり予定を超過し、参加者を交えての討論まで、

熱心に加わられた方々にご迷惑をおかけしてしまつた。運営に当つた主催側の一人として、事前の打合せをもっと十分組織すべきであつたと、司会・講師・ならびに参加者の方々におわびしたい。

しかし、「広い視野から日本文学研究の進展をはかる」という国際研究集会のねらいの一つは、小さくまとまるよりも、それぞれの学会ではとりあげにくい野心的なテーマに挑むということであり、司会、講師の方のご努力により、今回のシンポジウムも有意義なものであつたと信ぜられる。

(情報室 山中光一)

国際日本文学研究集会会議録(第二回)
 PROCEEDINGS OF THE 2nd INTERNATIONAL CONFERENCE
 ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN (1978)

目 次

あいさつ	市古貞次
スナップ集	
研究発表	
上代日本文学の時間論的研究・序説	桑川 光樹
古代信仰から見た万葉集の霧旅歌	ヘルベルト・ブルチョウ
日本文学と風土	長谷 章久
新古今時代における玉葉・風雅歌風の前兆 ——建礼門院右京太夫を中心として——	フィリップ・ハリス
竹園抄とその前後	リューベン・ゲーリング
近松浄瑠璃と音楽の節付	アンドリュウ・ガーストル
高村光太郎におけるアメリカ	湯沼 誠二
シンポジウム	
19世紀における日本文学 ——近世から近代へ——	
長谷川 泉	ドナルド・キーン
前 田 愛	アンドレ・デルティユ
記録編	
集会日程、研究集会の経過、参加者名簿、国際研究集会委員名簿 (※連絡先：国文学研究資料館情報室)	

図書資料管理システム

1、目的

国文学研究資料館では、すでに、図書館業務の機械化として、

- (1) マイクロ資料目録作成
- (2) 逐次刊行物目録作成

の2つのシステムを開発し、実際に稼動してきているが、業務全体を統合的に機械化するための土台がためとして、昭和52年7月の閲覧業務開始を機に、図書資料管理システムを開発することになった。

このシステムは、図書資料の所在と利用状況を把握して、ものとしての図書資料の管理を確実にするとともに、当然の結果として、閲覧業務の機械化を含むものである。

また、将来、資料のマスター・データ・セット(以後「MDS」と呼ぶ)の更新処理を簡素化することで、受入れのルーチンとつながるものであり、したがって、資料MDSは、

逐次刊行物目録の所蔵データ・ファイルとしても使えるものであり、もう一方で、問合せ機能が書誌データとむすびつけば、情報検索システムと連結する可能性をもつものであり、

また、このシステム自体のウェアージョン・アップによって閲覧業務の省力化もはかれるものである。

2、経過

昭和52年6月、整理閲覧室、情報処理室は、ファコム・ハイタック株式会社(FHL)のSEをまじえて、システム設計を開始した。

7月に手作業による閲覧業務が始まり、閲覧現場の実情が、機械化システム設計にも反映された。

11月には基本検討を終り、FHLとの間で仕様の確認を行った。

プログラム開発は、おもにFHLのSEによってすすめられてきて、昭和53年5月に、おおよそ完了した。これと併行して、12月から、主として整理閲覧室がデータを作成してきた。

6月からは、機能テストに入り、プログラムおよびデータ作成の最終的なつめを行った。

9月から試運転を始め、いくつかのバグを修正しながら、機能をひとつずつルーチン化すると同時に、ウェアージョン・アップへ向けての協議

が、継続的になされている。

3、特徴

国文学研究資料館の図書資料は、基本的には書庫に閉架してあるが、一部分は参考室に、一部分は閲覧室に、開架してあり、一部分は職員が館内貸出している。

したがって、従来行われてきたような、貸出中の資料だけをオンライン・ファイルにおく方法ではなく、資料のMDSとして、

- (1) 単行書 4万5千冊
 - (2) 逐次刊行物 千五百誌
 - (3) マイクロフィルム (二万冊) 6千リール
 - (4) 紙焼写真本 1万冊
- のすべての資料について、
- (1) 資料ID(コントロール・キー)
 - (2) 場所コード(書庫・参考室・閲覧室の別を示す)
 - (3) サービス区分コード(閲覧・貸出・複写等の条件を示す)
- などのデータを持ち、それらを端末から直接知り得るようにした。
- ここで、とりわけ特徴的なのは、
- (1) 資料のコントロール・キーとして請求記号を使ったこと
 - (2) 逐次刊行物について、(イ)巻号の(いわば書誌的)

レベル

(ロ)合冊製本された(いわば物理的)レベルの、2つのMDSを作ったこと

(3) オンライン処理において、大量の資料IDの連続入力が可能にしたこと

4、ファイル構成

このシステムは、つぎの5種類のファイルを持ち、図1のように関連づけている。

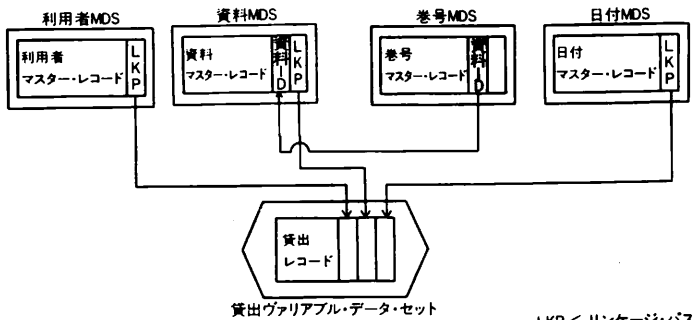


図1

- (1) 資料MDS
 - (2) 巻号MDS
 - (3) 逐次刊行物の巻号単位のファイルで、合冊製本単位のファイルである資料MDSとリンクしている
 - (4) 利用者MDS
 - (5) 登録した
 - (6) 館外個人
 - (7) 機関
 - (8) 業者
 - (9) 館内者
- について、利用者ID・所属機関・身分・分野・所属学会・生年・性別・貸出可能冊数・住所・電話番号・氏名などのデータをもっているファイル。この中で、住所・氏名は漢字コードでもっている
- 日付MDS
- 4年分の年月日について、曜日と、閲覧業務を行う日かどうかのコードとをもっているファイル
- 貸出ウェアリアル・データ・セット
- 利用中の資料について、資料ID・利用者ID・貸出年月日・返却期限日などをむ

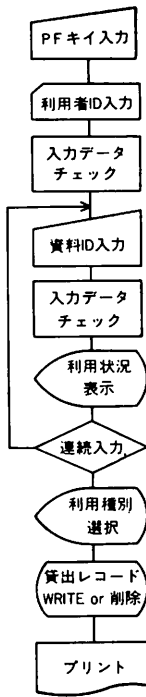


図2

すびつけているレコードからなるファイルこれらのファイルは、PDM (Practical Data Manager) というデータ・ベース・マネジメント・システムによって管理されている。PDMのデータ・ベースは、マスター・データ・セットとウェアリアル・データ・セットを組合わせたネットワーク構造であり、レコード同志は、レコード自身に埋めこまれたリンケージ・パスによって関連づけられている。

ファイルの全容量は現在のところ約2MBである。

5、機能

5、1 オンライン処理

図2に示すように、ファンクション・キー(PFキー)で機能の種類を選び、ウイデオ・データ・ターミナルに送られてくるメッセージに依りて、利用者IDを磁気カードによって入力し、資料IDをキーボードから入力し、利用種

- (1) 別をライト・ペンで選ぶ、というのが、処理の基本的なパターンである。
- (2) オンライン処理にかかわる機器を図3に示す。
- (3) 問合せ
 - (イ) 資料の利用状態の問合せ
 - (ロ) 利用者の利用資料の問合せ
 - (ハ) 予約日付による問合せ
 - (ニ) 年月日を入力して、日付指定の予約の有無を問合せ
- (4) 借出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ
- (5) 貸出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ
- (6) 借出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ
- (7) 借出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ
- (8) 借出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ
- (9) 借出
 - (イ) 貸付
 - (ロ) 他機関に対する、展示のための資料貸付
 - (ハ) 加工
 - (ニ) 製本・補修・マイクロフ

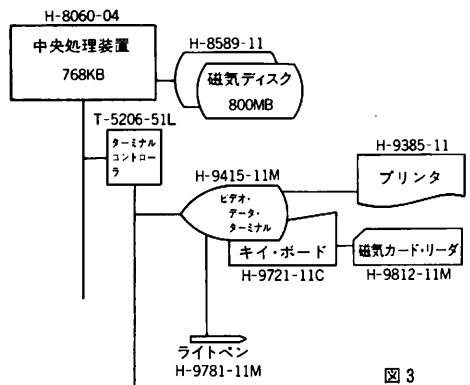


図3

- (6) サービス禁止および解除
 (イ) 資料IDのサービス禁止および解除
 一時的に紛失した資料のサービス禁止、発見されたときにそれを解除する
 (ロ) 利用者IDのサービス禁止
- (5) 子約解除
 (イ) 資料IDによる子約解除
 (ロ) 利用者IDによる子約解除
 更新
- (4) 返却
 (イ) 資料IDによる返却・更新
 (ロ) 利用者IDによる返却・更新
 利用希望年月日を指定した子約
- (3) 複製
 利用者の要求による複製のための、業者に対する資料引渡
 (イ) 子約1
 現在利用中の資料に対する、返却時の利用子約

- 5、2 バッチ処理
 現在のところ、MDSの更新と抽出プリントが可能である。更新データは、英数カナであればTS S端末から入力し、漢字であれば漢字入力機で作成する。
 近い将来に、種々の受入統計・利用統計の作成や、漢字プリンタによる督促状の作成などを可能にする予定である。
- (1) 資料MDS更新
 受入れた資料についてレコードを追加する。また、合冊製本された逐次刊行物について、資料MDSのレコードを合冊製本単位にし、巻号MDSのレコードをそれにリンクさせる。レコードの削除・訂正も可能である。
- (2) 利用者MDS更新
 オンラインで仮登録した利用者について、所属機関・身分・分野・所属学会・生年・性別・住所・電話番号・氏名などのデータを追加して、完全な登録を行う。削除や部分的な訂正も可能である。

- (3) 抽出プリント
 追加レコードだけを抽出して点検することなどを目的として、MDSの抽出プリントが可能である。
- (イ) 資料MDS抽出プリント
 (ロ) 巻号MDS抽出プリント
 (ハ) 利用者MDS抽出プリント

- 6、問題
 ウェアジョン・アップへ向けての
 (1) 巻号MDSを逐次刊行物目録の所蔵データ・ファイルとして使うための変更
 (2) オンライン処理の問合せから貸出への移行
 (3) 資料IDの入力の簡略化
 これらの問題の解決に向けても、十分な柔軟性をもったシステムである。

文献資料部事業報告

大久保 正

当部においては、年間五千点のマイクロフィルムによる文献資料の調査収集を基本的事業として毎年努力を続けてきたが、開館後二年目を迎えてその整理が研究情報部において追い追い進行し、一九七七年発行の『国文学研究資料館蔵マイクロフィルム資料目録』第一巻に続き、近く第二冊が刊行される運びとなっていることはまことに喜ばしく、館内外の関係各位に深い謝意を捧げたい。

文献資料に対する内外の関心の高まりと、複製事業の盛行とに伴ない、当部における調査・収集事業の発展は、開設当時予想もなかった種々困難な問題に逢着しているが、本館の遠大な目標に向って、初心に立ち帰り、予算その他の事情が許す限りいっその努力を続けていく所存である。大方のご支援を期待してやまない。

前号に引き続き昭和五十三年七月一日以降、十二月末日までに当部で行

なつた事業の概要をここに報告する。
近畿地区文献資料調査員会議の開催
七月十九日、京都市左京区牛宮町

日伊会館会議室において開催、当部
から松田が出席した。近畿地区にお
ける公共図書館・文庫等で未着手の
ものにつき、今後いかなる手続き・
方法で実施すべきかにつき、情報・
意見の交換を行なつた。その成果は
昭和五十四年以降の調査・収集計画
に生かされるはずである。

中国・四国地区文献資料調査員会
議の開催
七月二十四日、松山市三番町えひ
め会館会議室において開催、当部か
ら伊井が出席した。昭和五十一年度
から継続的に調査収集を実施してい
る河野記念文化館所蔵文献資料の調
査についての反省と今後の見通しに
ついて報告と意見の交換を行ない、
また当地区における調査収集計画に
ついて、情報と意見の交換を行な
つた。

九州地区文献資料調査員会議の開催
十一月六日、長崎市西山町長崎県
立図書館特別会議室において開催、
当部から村上が出席した。九州地区
の調査収集計画について説明と質疑
応答を行ない、次いで長崎県立図書
館共同調査についてその実施計画の

打合せを行なつた。なお、会議終了
後において、同図書館の共同調査を
実施した。

昭和五十三年度文献資料調査収集
の概況
一、調査
本年度当部が文献資料調査員の協
力を得て調査を行なつた図書館・文
庫等は概ね左の如くである。

北海道・東北地区 函館市立図書
館・秋田県立図書館・齋藤報恩会・
酒田市立光丘図書館
関東地区 内閣文庫・彰考館・前
橋市立図書館・徳田進氏(四孝文庫)・
川越市立図書館・東京芸術大学図書
館・学習院大学図書館・杉原広義氏
中部地区 名古屋市立鶴舞中央図
書館・神宮文庫・徳川美術館・静岡
県立図書館・刈谷市立図書館・西尾
市立図書館・射和文庫・蓬左文庫
近畿地区 陽明文庫・逸翁美術館・
京都女子大学図書館・中村幸彦氏・
大阪大学図書館忍頂寺文庫・京都大
学図書館額原文庫・同中院文庫・東
儀一氏
中国・四国地区 島根大学図書館・
河野記念文化館・愛媛大学図書館・
高知県立図書館
九州地区 長崎県立図書館・鹿児
島大学図書館

二、収集
昭和五十三年度の事業として、四
月一日以降五十四年一月末日までに、
当部が調査員の協力を得て収集した
(進行中のものを含む)マイクロフ
イルム資料の概況は左の如くである。
1 佐賀県立図書館蔵本(鍋島文庫)
「治乱記」ほか 二五〇点
2 群馬県太田市立中島記念図書館
蔵本
「本朝孝子伝」ほか 一四七点
3 長崎県飯田市立図書館蔵本
「弁山園記」ほか 三二〇点
4 蓬左文庫蔵本
「諸家隨筆」ほか 二四八点
5 名古屋市立鶴舞中央図書館蔵本
「奥羽軍記」ほか九九六點
6 宮城県図書館蔵本(伊達文庫)
「歌雜抄」ほか 三〇〇点
7 白百合女子大学図書館蔵本
「あ古木」光悦謄本)ほか 七五五点
8 東京芸術大学図書館蔵本
「住吉家鑑定控」ほか 九六六點
9 愛知教育大学図書館蔵本
「土佐日記考証」ほか 六七七点
10 広島文教女子大学図書館蔵本
「相生齋之松」ほか 四七〇点
11 大阪市立大学図書館蔵本(森文
庫)「人名考・決獄考・俳優考」
ほか 四五九点

12 鹿児島大学図書館蔵本(玉里文
庫)「日本書紀」ほか四七六點
13 宮内庁書陵部蔵本
「八州文藻」ほか 三六六點
14 陽明文庫蔵本
「竹取物語」ほか 二三五點
15 神宮文庫蔵本
「道の論」ほか 三五〇点
16 東洋文庫蔵本
「尚書抄」ほか 一二六點
17 久松国男氏寄託本
「悦目抄」ほか一〇二点
18 益田勝実氏蔵本
「歌仙家集補」ほか 一〇点
19 安井章吾氏蔵本
「荒木田鹿女貞蹟」ほか三〇点
20 東儀 一氏蔵本
「御杖先生和歌」ほか 二九点
21 杉原広義氏蔵本
「住吉物語繪巻」一点
22 東京大学竹冷文庫(既成マイク
ロ) 二二五點
23 その他 一三二点
計 四、八八〇点

ほか 四五九点

研究情報部事業報告

古川 清彦

国際日本文学研究会・公開講演会・展示等の対外的な企画も回を重ねて業務化してきた。「マイクロ資料目録」「逐次刊行物目録」「国文学研究文献目録」等の目録作成も進捗している。計算機の稼動にもなうプログラムの開発も一年を過ぎて、目録編集や資料管理業務が機械化された。マイクロフィルムの流れや計算機システム関係事項も整備されつつある。

以下各室毎に状況を報告する。

(一)情報室。別掲の当館主催第二回国際日本文学研究会(昭和五十三年十一月十六・十七日)の事務局を担当し、この研究会の会議録を作成し、関係機関等に配布した。館報は本号のほか第十一号(昭和五十三年九月)を発行した。新聞情報は昭和五十二年度分の索引作成を完了し、編集室で行っている五十二年版の「年鑑」編集に役立てている。現在は五十三年度の記事を整理中である。

(二)整理閲覧室。激動の開館の時期を過ぎて早くも一年たった。七月から

十二月まで業務全般の安定をはかりルーチンワークを確立することに力を注いだ。六月十六日には制度上の整備が行われ、これまでの二係(整理係、閲覧係)に加えて受入係が設置された。「マイクロ資料目録」第二巻の作成作業については順調に進みつつあり年度内に出版されよう。

ただ今後索引作成のための典拠ファイルの作業を進める必要があるし、また記述目録のあり方についても作業がらみで検討すべき点を残している。「逐次刊行物目録」も本年度中に第二版が完了する予定である。新しいCCS(オンラインによる資料管理システム)はほぼ軌道にのった。CCSは当室の業務(受入業務や閲覧管理を含む資料管理)の土台的な要素をなすもので、今後当室がどのようにしてCCSに乗って業務を進めていくかはかなり重要な課題である。ルーチンワークの進捗状況については(1)受入業務。図書については順調である。七月一日から十二月八日までの受入れ図書(備品図書)は二五二九冊。継続受入逐次刊行物は

総点数五〇〇点である。又CCSに沿ってこの逐次受入システムを更新中である。マイクロフィルム到着フィルム数は五十二年度まで総計六二七三リールおよび九〇〇九枚(ラッシュ)である。マイクロフィルム収集の流れに関しては館全体として最も重要な問題として再検討されており、この動きと共に受入係のフィルム受入れの業務が明確かつ迅速化されるであろう。(2)整理業務。古書、マイクロ資料については順調である。

新刊図書の整理、マイクロ資料の複製(ポジフィルム、紙焼写真本の作成)に更に力を入れねばならない。(3)閲覧業務。利用者数も安定し、新しい業務の基盤ができた。

なお当室は図書資料委員会(月一回)、図書選定小委員会(不定期)の庶務を担当している。

(三)編集室。十二月末に「国文学研究文献目録(昭和五十一年)」を編集完了し、一月には至文堂から市販もされる。前年に比して二〇頁の増、例年二、三〇頁の増のようである。また本年度はもう一冊の刊行を予定しており、従来の文献目録に学界の情報に加え(具体的には、学界展望・学会一覧・学会研究発表一覧・新指定

文化財目録・科学研究費等交付一覧・計報の項を新しく設け)、「国文学年鑑(昭和五十二年)」として三月末刊行をめざして編集中である。また「国文学研究資料館紀要」五号は八篇の論文及び資料を収めて、三月中に刊行の予定である。

④参考室。参考質問の受付、回答、またそれらを記録した参考質問票の蓄積に努めている。また参考用図書選定、参考用資料作成に従事している。参考用資料としては「館蔵活字本謡曲曲名索引」、「参考室配架翻刻複製本作品目録及び底本目録(作業中)」、「件名目録(参考室配架のもの)」、「作業中」などがある。なお「漢籍類書項目索引(参考室配架のもの)」を予定している。国文学普及の業務として(1)講演会は、夏期講演会(八月二十四日・二十六日、既報)に続いて十一月十八日(土)一時三〇分より

「近代文学における妻の投影」成城大学教授・高田瑞穂氏
「日本文学の魅力―中世文学を中心として」

ケムブリッジ大学教授・当館客員教授 タグラス・ミルズ

(Douglas Mills)氏
を開催した。(2)展示会は、特別展示

「古今集—初雁文庫蔵本を中心として(六月二十四日〜七月七日)」に続いて常設展示「八犬伝とその周辺」(九月二十二日まで)、また国際日本文学研究集会のシンポジウムのテーマにあわせて常設展示「幕末維新の文学(十二月二十六日まで)」を開催した。

④情報処理室。当館の収集する「マイクログラフ資料目録」については、五十二年三月、当館のシステムによる最初の成果として簡略版を作成したが、本年度は、その後の八、二四三本の正式の目録(一九七八年版)の作成を行った。「逐次刊行物目録」は、巻号のほか、何月号かを示すように二部の機能アップをはかり最新号までの改訂版を作成中である。所蔵資料の所在問合せ、予約、利用者登録、閲覧管理などをオンラインで行う資料管理システム(CCS)も既に整理閲覧室の実用に供され、毎日のデータのバックアップ等が当室のルーチンのオペレーションとして処理されている。そのほか漢字出力ルーチン、ジョブ管理ルーチン等、業務上必要なプログラム、および追加漢字を整備し、当面の管理運用要項を定めて、業務の体制を整えつつある。過去の研究の文献目録データの入力も

既に四年分を累積しており、マイクログラフデータの累積とともに、それらを蓄積・検索するためのデータベース・マネージメントシステムの検討開発に着手している。また科学研究所特定研究の「学術情報」および「言語」により、それぞれデータベースおよび漢字システムの研究を行っている。

※マイクログラフ室。(1)七月から十二月までの間に五十二年度に収集したマイクログラフのうち、四六二リールについて閲覧用ポジフィルムを作成し、三九〇リールについて紙焼写真本(計二、七一八冊)を作成した。(2)同じ時期に五十二年度収集分のうち六八八リールについて第二ネガフィルムを複製した。(3)館内において教育研究所移管本一リール(五点)を撮影した。(4)複製要求に応じるための用意として貴重書および特別コレクションの撮影を継続してきたが、今期中に貴重書十二リール(九点)、特別コレクション十リール(六二点)を撮影して、この作業を完了した。

この時期に当館所蔵本について十二リール撮影した。(5)閲覧カウンターでの複写申込を受けて、紙焼四十点、ポジフィルム十二件、リータープリンタ三十七件、撮影五件(十四点)

目録

次の二つの目録を3月に刊行、関連図書館、研究機関へ配布の予定です。

▼国文学研究資料館蔵

マイクログラフ資料目録 1978

つぎの三十八の所蔵者からマイクログラフによって収集した八、二四三本の古書を収録した目録

北海道大学附属図書館

東京大学総合図書館(秋葉文庫)

東京大学文学部国文学研究室

和歌山大学附属図書館(紀州藩文庫)

京都大学文学部国文学研究室(頼原文庫)

国立公文書館内閣文庫

果立長野図書館(威徳院本)

東京都立中央図書館

酒田市立光丘図書館

長野市(田真田家本)

芭蕉記念館(芭蕉文庫)

刈谷市立刈谷図書館(村上文庫)

水府明徳会彰考館

神宮文庫

旧初雁文庫(国文学研究資料館所蔵)

松平公益会

本居記念館

賀茂別雷神社(三手文庫今井似閑蔵)

本・三手文庫泉字本)

金刀比羅宮図書館

東京大学文学部国文学研究室(本居文庫)

九州大学文学部

名古屋市蓬左文庫

岩国徴古館

高岡市立中央図書館

大阪市立大学附属図書館(森文庫)

伊達開拓記念館

市古貞次

井田等

某家1(広島)

常徳寺

伊達邦泰

太山寺

野坂利器

長谷寺(豊山文庫)

増田昌三郎

松井明之

山岸徳平

祐徳稲荷神社(中川文庫)

▼国文学研究資料館蔵

逐次刊行物目録 1979年2月

現在

1977年版を増補改訂した。学会誌・紀要等の所蔵目録。国際標準書誌記述(ISBIS)にのっとり、

六八九誌を収録

を作製した。この分の申し込みは確實な増加傾向にある。(6)特殊形態資料に関する撮影仕様ができた。その他カラーマイクロによる撮影の仕様を検討している。

共同研究

当館は国文学研究者の共同利用の施設であり、先年来、共同研究の実施について、館内で検討してきたが、五十二年度より、「国文学文献資料の解題研究」をテーマとして、共同研究のあり方を討議し、実践例として、初雁文庫本を対象に、その解題研究を進めてきた。

五十三年には「国文学研究資料館共同研究委員会」が設置され、当館教官五名・国文学に関する学識経験者五名計十名(名簿は十二号に掲載)に委員を委嘱し、共同研究の計画および実施に関する事、共同研究員の選考に関する事は、今後この委員会において審議することとなり、七月十八日・九月二十六日・十二月十九日と三回にわたり委員会を開催した。

五十三年度の共同研究は、五十二年度の初雁文庫解題研究の継続(仮称初雁班)と共に、あらたに版本に

おける解題研究のあり方を、俳書を中心として、具体的に考える(仮称俳諧班)との二本立てとなった。

共同研究員は、当館教官六名、館外学識経験者九名(十一号名簿参照)で、屢次当館で会合、本年度の成果としては、初雁班では、五十二年

の約七十点に、五十余点を加え、俳諧班では、俳書解題のマニユアルを作製、具体的に解題研究を進めた。

なお次年度(五十四年度)においては、俳諧班は、酒田光丘図書館所蔵俳書の解題を行なう。

初雁班は、もはや存在しなくなるが、次には前記共同研究委員会の決定に基づき、当館寄託久松家蔵本(久松潜一博士収集の歌学書類約百点)を二年計画で取り組むこととし、その第一年目として少人数で若干点を試行するほか、そのメンバーによつて初雁班の最終的な処理(出版のための原稿の整備等)を行なう予定である。

(担当責任者 松田修・福田秀一) 評議員会議の開催について 本年度第二回評議員会議が去る三月六日(火)一〇時三〇分から当館中会議室において石井議長ほか一三

名の評議員の出席を得て開催され、昭和五十四年度予算内示、昭和五十三年度事業(中間)報告、昭和五十四年度事業概要等について評議が行われ有益な助言を得た。

主な来館者

文部省長期研修生40名 岡田六郎、岩井昭三氏(九大附属図書館)

藤田健治氏(放送教育開発センター所長)

岡見正雄氏(関西大学)

駒沢大学史学科学生20名

文教女子短大図書館学研究室15名

エドウィン・A・クラウンストン氏(ハーバード大東洋学部日本文学教授)

神奈川県図書館協会大学図書館運営委員会15名

慶応大学図書館情報学科学学生15名

編集後記

◇ 昨年(の)国文学研究資料館報告No.1に引き続き、今年度は、

「マイクロ資料目録」作成システム

漢字データ処理用ソフトウェア

図書資料管理システム

の三つの報告も作成され、当館の出版物も次第にふえてきました。

国文学研究資料館要第五号 昭和五十四年三月発行予定 この目録は至文堂で市販しております

国文学研究資料館紀要第五号 昭和五十四年三月発行予定 短編物語の時間・序説 阿部好臣 「このついで」をめぐって 室町期物語の絵詞資料 阿部好臣 お伽草子性・座頭芸・狂言と室町小歌 徳田和夫 幸若弥次郎家本舞曲に関する一推論 村上学 可笑記と講釈 渡辺守邦 増地幸若舞・曲舞年表稿 市古貞次 栗柄野物語(仮称) 伊井春樹 一解説と翻刻 伊井春樹 鼠の草子 翻刻 ゲグラス・ミルズ MARC 内部レコードと008欄 内藤衛亮 一都市販子定

国文学研究資料館報 入手ご希望の方は 郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料として一号につき六〇円切手を同封して当館情報室あてお申し込みください

昭和五十四年度春季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会提出は五十音順、以下①事務局（東京都は省略）②大会開催日③会場の順。

- 解釈学会①豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内②未定
- 近代語学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内②七月七日③昭和女子大学
- 国語学会①千代田区神田錦町三―十三一武蔵野書院内②五月十二―十三日③京都会館
- 古事記学会①千葉県市川市国府台二―八一三〇東京医科歯科大学教養部歴史学研究室内②六月二―三―五日③鳥根大学
- 古代文学会①八王子市上川町三八八―高野正美方②予定なし
- 上代文学会①杉並区永福一―九一―明治大学和泉校舎大久間研究室内②五月十九―二一日③宮城学院大学・東北福祉大学
- 説話文学会①埼玉県上尾市戸崎八一

女子聖学院短期大学内②六月二四日③女子聖学院短期大学

全国国語国文学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内②六月二―三日③聖心科学研究室内②六月二―三日③聖心女子大学

- 中古文学会①京都市上京区今出川通烏丸東入新北小路町同志社大学文学部国文学研究室内②五月十二―十三日③大阪女子大学
- 中世文学会①港区三田二―十五慶応大学文学部国文学研究室内②六月九―十一日③慶応大学
- 日本演劇学会①新宿区西早稲田一―六一一早稲田大学演劇博物館内②開催日未定③共立女子大学
- 日本歌謡学会①渋谷区東四―十一二八国学院大学文学部白田研究室内②五月十一―十二日③国文学研究資料館
- 日本近世文学会①渋谷区渋谷四―四一―二五青山学院大学日本文学研究室内②六月二―三―三日③国文学研究資料館
- 日本近代文学会①千代田区紀尾井町

七上智大学文学部国文学研究室内②五月十九日③上智大学

日本口承文芸学会①渋谷区東四―十一二八国学院大学文学部白田研究室内②六月三日③立命館大学

日本文学協会①豊島区南大塚二―一七七一―〇日本文学協会②予定なし

日本文学風土学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内②五月十九日③昭和女子大学

- 日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学文学部国文学研究室内②六月九―十日③東北大学文学部
- 俳文学会①豊島区目白一―五十一学院大学文学部国文学研究室内②予定なし
- 表現学会①愛知県愛知郡長久手町長湫字片平愛知淑徳大学国文学研究室内②五月十九―二十日③山口女子大学
- 仏教文学会①横浜市鶴見区鶴見二―一―三鶴見大学文学部日本文学科内②六月三―七月一日③鶴見大学
- 万葉学会①大阪府吹田市千里山東三関西大学文学部国文学研究室内②予定なし
- 美夫君志会①名古屋市中昭和区八重本町一〇―一二中京大学国文学研究

室内②七月二―三―三日③中央大学

和歌文学会①八王子市東中野七四二中央大学文学部長崎研究室内②予定なし

国文学年鑑（昭和52年）
昭和五十四年三月末発行予定

国文学研究資料館編「国文学研究資料館目録」に、

- ・学界展望
- ・学会一覧
- ・学会研究発表一覧
- ・新指定文化財目録
- ・科学研究費等交付一覧
- ・計報

等の学界情報を加えて年鑑としたものです。

一部市販予定

国文学研究資料館報 第十号
昭和五十四年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―六一―〇
郵便番号一四二
電話（七八五）七三二（代）
印刷所 株式会社 三興